

氏名 室 泰子
授与した学位 博 士
専攻分野の名称 医 学
学位授与番号 博 甲第 6221 号
学位授与の日付 2020 年 6 月 30 日
学位授与の要件 医歯薬学総合研究科病態制御科学専攻
(学位規則第 4 条第 1 項該当)

学位論文題目 Decreased Serum Antioxidant Marker is Predictive of Early Recurrence in the Same Segment after Radical Ablation for Hepatocellular Carcinoma
(抗酸化力低下は肝細胞癌焼灼術後の同一区域内早期再発の予測因子となる)

論文審査委員 教授 藤原俊義 教授 八木孝仁 准教授 平木隆夫

学位論文内容の要旨

肝細胞癌に対するラジオ波焼灼術は、切除術に匹敵する局所制御率を有しているが、他部位を含めた再発は認める。酸化ストレスは肝発癌を誘発する悪しき生体反応とされているが、一方で、癌細胞に対しては制御的に働き、発癌期においてどのような酸化ストレス状態が好ましいのか明らかでない。本検討で我々は、235 例の新規単発肝細胞癌でラジオ波焼灼術を行った症例で、再発様式と酸化ストレス状態の関連を評価した。酸化ストレス状態は治療前の血清検体で測定した酸化ストレスマーカーdROM と抗酸化力マーカーOXY 吸着テストで評価した。予後不良に関係する要因は肝予備能評価である Child-Pugh スコアの高値と 2 年以内同一区域内再発症例であった。2 年以内同一区域内再発症例は、腫瘍サイズが大きく、OXY 低値であった。OXY 高値を反映する抗酸化力の維持が予後不良因子である 2 年以内同一区域内再発を避けるために重要であると考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究は、肝細胞癌に対するラジオ波焼灼術後の予後に影響する因子を明らかにするために、特に酸化ストレス状態に注目して探索した後方視的臨床研究である。

ラジオ波焼灼術を受けた肝細胞癌患者 235 例を対象に、酸化ストレス状態を治療前の血清検体の酸化ストレスマーカーdROM と抗酸化力マーカーOXY 吸着テストを測定して評価し、再発形式との関連を検討した。その結果、肝予備能を表す Child-Pugh スコアの高値と 2 年以内同一区域内再発症例が予後不良因子であり、多変量解析にて 2 年以内同一区域内再発症例では腫瘍サイズが有意に大きく、OXY が有意に低値であった。

委員からは、統計解析手法や解析項目の選択の妥当性などについて、また外科治療後の再発形式に基づく再発時期の選択の妥当性などについて質問がなされ、今後の展望も含めての回答が得られた。

本研究は、肝細胞癌のラジオ波焼灼術後の 2 年以内の同一区域内再発を予防するためには、肝予備能と抗酸化力の維持が重要との方向性を示した点で、重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。